

否定が可能なムード形式について

——中国語と対照の角度から

張 偉莉

要旨

文が「コト」と「ムード」の两部分から成ることは周知の通りである。寺村(1979)では、日本語のムードを表す「助動詞、補助動詞を、その内側(先行する用言)と外側(それ自体)についての否定化の可能性という観点から」整理した。本稿では、寺村(1979)の整理をもとに、文において、ムード形式の内側(先行する用言)と外側(それ自体)ともに「肯定否定両形可能」な部分に焦点をあて、この類の助動詞、補助動詞を含む日本語の文が中国語ではどうなるのかをしてみる。特に否定文の場合、日中両言語の相違点を探ってみる。日本語では、ムード形式の内側(先行する用言)の否定と外側(それ自体)の否定が形式上容易に区別されるのに対して、中国語の場合、ムード形式の内側(先行する用言)の否定と外側(それ自体)の否定の区別が、形式だけによるのでは、はっきり判断できないケースがあることが分かった。否定の場合、中国語は副詞や「動詞+補語」などの手段をとって、原文の意味に近づけようとする傾向が見られる。分析から見出した一番大きな課題は、中国語の「能願動詞」と否定の関係を整理することである。

キーワード: コト、ムード、否定、スコープ、能願動詞、主観的要素

1. はじめに

文が「コト」と「ムード」の两部分から成ることは周知の通りである。寺村（1979）では、ムードを表す形式と否定辞との関係を分析、整理した。日本語のムードを表す「助動詞、補助動詞を、その内側（先行する用言）と外側（それ自体）についての否定化の可能性という観点から」、表に整理している（次ページ参照。網掛筆者）。

本稿では、寺村（1979）の整理をもとに、文において、ムード形式の内側（先行する用言）と外側（それ自体）ともに「肯定否定両形可能」（上表網掛）の部分に焦点をあて、以上の助動詞、補助動詞を含む日本語の文が中国語ではどうなるのかを見てみることにする。特に否定文の場合における、日中両言語の相違点を探ろうとする。

なお、日本語特有の表現「ヤリモライ」表現については果たして本当にムード形式と言っていいのかどうか、現段階では疑問に思っているため、今回は検討の対象から外すことにする。

外 内	肯定否定両形可能	肯定のみ	否定のみ
肯定 否定 両形 可能	ハズダ、ワケダ、ノダ モノダ、ツモリダ (オイシ) ソウダ ～シテヤル、クレル、 モラウ、など	ダロウ (降ル) ソウダ カモシレナイ、など (降ル) ラシイ (降ル) ヨウダ	ドコロ (デハナイ)
肯定 のみ	～ベキダ ～テイル ～テアル、など (アスペクト補助動詞) (男) ラシイ	～トコロダ ～バカリダ	

2. 分析

ムード形式の内側（先行する用言）と外側（それ自体）ともに否定の形を許容するものに関して、問題となるのは、「それ（筆者注：ムード形式）が包み込むコトを否定する場合と、それ自体が（外側で）否定形をとる場合とで、どう意味が違うかということだ」（寺村 1979：202）。日本語においてムード形式の内側（先行する用言）と外側（それ自体）の否定の意味的違いを分析するのが一つの問題だとすれば、これらを中国語に訳した場合、ムード形式の内側（先行する用言）と外側（それ自体）の否定は形式上どうなっているのか、中国語において、ムード形式の内側（先行する用言）と外側（それ自体）の否定の意味的な違いはどうなっているのかなどの問題も、検討すべきだと思う。よって本稿では、日本語のムード形式の内側（先行する用言）と外側（それ自体）の否定を出発点として、対応している中国語の文と対照しながら、各形式が中国語にどう反映しているのかをみてみることにする。

2.1 ムード形式の内側（先行する用言）の肯定と否定

この節では、事柄に関する話し手の主観的判断（または態度）は変わらないが、事柄が是か非かによって、意味的に対立しているケースを見ることにする。

さて、否定文に関する研究において、否定のスコープと焦点が最もよく取り扱われている問題である。日本語の場合、否定のスコープは工藤真由美（2000）によると、「可能な否定の範囲」である。中国語の場合、呂叔湘（1985）によると、「在句子里，不或没的否定范围是不或没以后的全部词语」（呂叔湘 2005：583）。即ち、「文において、（否定辞）“不”または“没”の否定範囲はそれ以後の全部内容」である。本稿では、日本語と中国語をそれぞれ、工藤（2000）と呂（1985）を参考に、否定のスコープを分析していくことにする。

また、翻訳の際、原文をどう伝達するかということにおいて、表現が翻訳者の数ほどあると言える。したがって、否定の焦点がずれる場合も考えうるが、本稿では、日本語を中国語に訳したとき、「実際の否定の対象」となる否

定の焦点をできる限り一致させるようにしている。従って、日中の文を対照するとき、否定の焦点を検討内容から外すことにする。なお、この節の例文に関しては、a 肯定事柄＋ムード形式、b 否定事柄＋ムード形式、の順に挙げていくことにする。

1) a 今日先生がいらっしゃるはずだ。

b 今日先生がいらっしゃらないはずだ。

例1) は先生が大学にいらっしゃるかどうかにについて、話し手が自分の知っている事実から推論して、その結論を相手に述べる言い方である。例えば、今日は水曜日で、毎週水曜日に授業があるので、先生はいらっしゃるという事実から推論した場合は、上の a のようになる。逆に、今日は水曜日だが、先週先生から出張があるとの連絡があつて、休講になった事実から推論した場合は、上の b のようになる。1) を中国語に訳すと、

[1] a`今天老师应该在。

b`今天老师应该不在/没在。

推測を表すムード形式「はずだ」に対応する中国語の主観的形式は“应该(yīng gāi)”という能願動詞である。「はずだ」自体が否定されていないのに対して、“应该”も否定されていないのである。「はずだ」というムード形式において、ムード形式の内側(先行する用言)の否定の場合、日中両言語には大きな違いがないと言える。

つぎは「わけだ」について、対応している中国語の形式をみたいが、その前に、「わけだ」について、寺村(1979)はこう解釈している。「まず、ワケダであるが、一言でいうと、ある(既知の)事実について、なぜそうなのかということを推論の形で説明する表現だといってよいかと思う。」(寺村1979:204)。そして、「わけだ」の例文の一つに寺村(1979)は次の例(32)を挙げている。

(32) ……結局、これは数をそろばんで表したのと同じ形である。してみるとコマを動かさなかった桁を表す記号、すなわち“0”の用意がいるわけである。

(村田全・茂木勇「数学の思想」)

これを中国語に訳すと次のようになる。

[32] ……結果和用算盘表示数字的情况一样。在这种情况下，需要一个档来表示算珠没有移动的数位，即数字“0”。

この場合、中国語文の中に「わけだ」に対応する主観的要素を表す言語形式が見当たらない。否定文の場合も同じである。

(32) `……コマを動かさなかった桁を表す記号，すなわち“0”の用意がないわけである。

[32] `……就不需要一个档来表示算珠没有移动的数位，即数字“0”。

次の「わけだ」を含む文も同じく「わけだ」に対応する主観的要素を表す言語形式が見当たらないことになっている。

2) a 今日は休講なので、彼は家にいるわけだ。

b [週末ですが、仕事が入ってきたと聞いて]それで、彼は家にいないわけだ。

[2] a `今天停课，所以他在家。

b `……所以他不在家。

「推論の形で説明する表現」である「わけだ」に対応している中国語は語形上主観的要素と関わる標識が見当たらないのである。これはもちろん「わけだ」の意味内容などと深く関わっていると思う。このような「有標識から無標識になる」ケースは翻訳の場合も勿論一つの問題であるが、日本語を訳した、「無標識」な中国語の中から元の主観的要素をどうすれば見出すことができるのか、更に、中国語において、主観的要素の表出方法等の問題にも関わってくるだろうと推測できる。これらについてはこれから検討する余地が十分あると言えよう。

3) a あの病人は、私の友達の息子なのだ。

b あの病人は、私の友達の息子ではないのだ。

[3] a `那个病人，是我朋友的儿子。

b `那个病人，（并）不是我朋友的儿子。

「のだ」というムード形式の場合、「否定+のだ」という形式によって、中国語は副詞“并”¹を加えることによって原文の意味により近いことになる。

¹ “并”について、小学館『中日辞典』の解釈：決して、別に。否定の副詞“不、没

これは主観的要素を導いているとも言える。そこから、主観的要素を表す時、中国語ははっきりした標識がない場合、補助手段として副詞を用いる傾向があると思われる。

4) a あなた、そんな事は、自分から報告するものだ。

b あなた、そんな事は、自分から報告しないものだ。

[4] a 那种事情，你应该主动报告。

b 那种事情，你不（应）该主动报告。

「ものだ」の場合、中国語と日本語に形式上、大きな違いが見えてくる。日本語の場合、ムード形式「ものだ」自体は否定されていなく、スコープ外に位置している。それに対し、中国語の場合、「ものだ」に対応している主観的要素をあらわす“(应)该”が否定辞“不”の後に位置していて、スコープ内であることが分かる。“(应)该”を無理に否定のスコープ外に置かれると、中国語の文は“那种事情，你（应）该不主动报告”となるが、かなり不自然な文に感じてしまう²。

日本語では否定のスコープ外に位置する要素が、中国語に訳すと否定のスコープ内に位置することになる原因は、おそらく中国語の主観的要素を表す語、即ち能願動詞“应该”の意味内容に関わっていると思われる。また、前文で見た通り、日本語の「はずだ」も「ものだ」も中国語では“应该”という形式で現れているのも興味深いところである。これらの日本語を通して中国語の語彙、特に能願動詞の意味内容を分類・整理することができるのではないと思われる。

5) a 太郎は夏休みに国に帰るつもりだ。

b 太郎は夏休みに国に帰らないつもりだ。

[5] a 太郎打算暑假回国。

b 太郎打算暑假不回国。

「つもりだ」の場合、中国語にも能願動詞“打算”が存在している。これは中国語の「ムード形式」だと言ってもよいと思われる。太郎が「夏休み

有、未、无、非”などの前につけ、一般の予想やもとの考えと実際の状況が異なることを説明する。多くの弁解や反駁の口調となる。

² “应该”と否定の関係については、張（2007）をご参照ください。

に国に帰る」かどうかという事柄の真否によって、肯定文と否定文に分けているが、否定文の場合、日中ともにスコープと焦点がはっきりしていて、「国に帰る」ことになっている。

6) a お母さんが作ってくれた料理、おいしそうだ。

b 自分の作った料理、おいしくなさそうだ。

[6] a 妈妈做的菜看起来好香。

b 自己做的菜看起来(都)不香。

「そうだ」に関して、寺村(1979)によると、前接するのは動詞か形容詞かによって、否定との関係が変わってくる。ここで挙げている「形容詞+そうだ」はムード形式の内側先行する用言)と外側(それ自体)の両方が否定になり得るが、「動詞+そうだ」の場合、ムード形式の内側(先行する用言)の否定が無理だと言われている。

例：雨が降りそうだ。

雨は降りそうにない。

*雨は降らなさそうだ。

さて、例[6]の中国語の文には“看起来”(「見たところ」という意味)によって、「形容詞+そうだ」のニュアンスを表している。「そうだ」に対応する主観的要素を表す語がなく、「動詞+補語」という形式によって原文の意味を表しているわけである。しかし、日本語の場合「そうだ」が存在することによって、主観的要素と関わっていると容易に判断できるが、中国語の文を見て、それが主観的要素と関わっていると感じられる中国語話者が何人いるかと疑問に思う。

以上のことから、「形容詞+そうだ」の場合、日中両言語は表現の仕方がかなり違うと言えよう。日本語は「そうだ」というムード形式を用いるのに対して、中国語は「動詞+補語」という形式を用いるのである。

中国語において、「動詞+補語」という形式と主観的要素との間に真に関連があるのかどうか、あるとしたら、両者の間に対応規則が潜んでいるのか、どんな規則なのかなども究明の余地がある。

以上は日本語のムード形式の内側(先行する用言)が否定になる場合、日本語文とその中国語訳を対照してみた。その結果、次のようにまとめること

ができよう。

●構文配置から見て、日本語のムード形式の内側（先行する用言）の否定の場合、否定の標識「ない」はムード形式の前に位置する。それによって、ムード形式が否定を包んでいることが分かる。それに対し、中国語の否定標識“不”（または“没”）はムード形式の後に位置する。それによって、ムード形式が否定を支配していることが分かる。もっとも、このような構文配置の違いは日中両言語の本質によるものだと考えられる。

●否定のスコープから日中の否定文を見て、中国語には、日本語のムード形式とははっきりした対応形式（主に能願動詞である）がある場合、日中の文がほとんど一致することになっている。但し、中国語のムード形式“应该”に関しては、日本語の「はずだ」と「ものだ」とともに対応していて、元の日本語の否定のスコープと関係なしに、否定のスコープ内に入ったり、入らなかったりしている。また、日本語の「そうだ」は前接する語が動詞か形容詞かによって、ムード形式の内側（先行する用言）の否定が出来るかどうかに分けているが、それに対応している中国語のムード形式はどうかとも検討すべき問題の一つだと思われる。

●日本語のムード形式に対応している主観的要素を表す形式がない場合、中国語は他の表現形式に助けを求めることがある。本稿で挙げた例では副詞と「動詞＋補語」の形式が見られた。中国語において、これらの表現と「否定＋主観的要素」との相関関係も究明したい点である。

2.2 ムード形式の内側（先行する用言）の否定と外側（それ自体）の否定

呂叔湘（1985）には、“一个词在不在否定范围之内，有时候会产生重大的意义差别”（p. 583）のような記述がある。即ち、中国語では、語が否定辞“不”または“没”の否定範囲以内、つまり、その後に位置するかどうかによって、文の意味が大きく変化するのである。例として呂叔湘（1985）が挙げたのは：

A 我一直没生病：我没一直生病。

B 他天天不上班：他不天天上班。

形式だけを見ると、Aの“一直”（ずっと）、Bの“天天”が否定辞“没”

と“不”の前に位置するか後に位置するかの区別であるが、それを日本語に訳すと、

A`私はずっと病気ではなかった(ずっと元気だった):私はずっと病気ではなかった(時々病気だった)

B`彼は毎日出勤しない:彼は毎日出勤するのではない。(二日に一度出勤するのだ)と言わなければならない。

Bの日本語訳を見ると、「出勤しない」という「否定の判断」と「出勤するのではない」という「判断の否定」の対立が見えてくる。これこそムード形式の内側(先行する用言)の否定と外側(それ自体)の否定の対立ではないだろうか。

では、2.1 で見たムード形式の内側(先行する用言)の否定文を外側(それ自体)の否定文に変えた上、中国語に訳したら、こうした区別がうまく対応できるのだろうか。

7) a 今日先生はいらっしゃらないはずだ。

b 今日先生がいらっしゃるはずではない。

[7] a`今天老师应该不在/没在。

b`今天老师不应该在。

2.1 節で述べたように、先生が大学にいらっしゃるかどうかについて、話し手が自分の知っている事実、例えば、毎週の水曜日に授業がある。今日は水曜日だが、先週先生から出張があるとの連絡があつて、休講になった事実から推論した場合は、上のaのようになる。それに対して、今日は先生が出張で休講になっているのに、先生がいらっしゃるということに対して、話し手がそれを否定するときに、bになる。bの場合、「先生がいらっしゃる」というのは想定外のことである。話しているのが先生自身なら、ここにいることに対する弁解に聞こえることにもなる。この点から、語氣的にもaより強いと言える。

否定のスコープに関しては、中国語の文を比較してみると、a`の“应该不”に対して、b`は“不应该”という形式になっている。語順によって意味を決めることが一目瞭然である。

もちろん、日本語では、bの言い方としては現実的に「先生がいらっしゃる

はずではなかった」というのが普通だと思われるが、関連のテンスの問題も興味深く、これからこのような問題をテーマにして研究を進めていきたいと思う。

それはそうとして、他のムード形式を見てみよう。

- 8) a 週末も仕事が入ってきたので、彼は家にいないわけだ。
b 週末も仕事が入ってきたので、彼は家にいるわけではない。

[8] a `周末也有工作，所以他不在家。

b `周末也有工作，所以他不在家。

- 9) a あの病人は、私の友達の息子ではないのだ。

b あの病人は、私の友達の息子なのではない。

[9] a `那个病人，并不是我朋友的儿子。

b `那个病人，并不是我朋友的儿子。

- 10) a あなた、そんな事は、自分から報告しないものだ。

b あなた、そんな事は、自分から報告するものではない。

[10] a `那种事情，你不(应)该主动报告。

b `那种事情，你不(应)该主动报告。

例 8)、9)、10) を見てみると、日本語の場合、ムード形式の内側（先行する用言）と外側（それ自体）の否定とは形式上はつきり違っているのに対して、中国語の場合、形式上区別がつかない。

また、次の例 11) で分かるように、「つもりだ」に対応している“打算”の場合、否定辞とムード形式の位置関係がはっきりしている。

- 11) a 太郎は夏休みに国に帰らないつもりだ。

b 太郎は夏休みに国に帰るつもりではない。

[11] a `太郎暑假打算不回国。

b `太郎暑假不打算回国。

- 12) a 自分の作った料理、おいしくなさそうだ。

b 自分の作った料理、おいしそうではない。

[12] a `自己做的菜看起来都不香。

b `自己做的菜不是看起来都很香。

例 12) においては、ムード形式の内側（先行する用言）と外側（それ自体）

の否定の区別を中国語は「強調」という手段を取る。判断動詞“是”は否定の焦点を強調する役割がある。“是”がないと、「そうだ」に対応している“看起來”が否定のスコープに収まることのできないのである。

この節ではムード形式の内側（先行する用言）と外側（それ自体）の否定を比べてみてきた。その結果、以下のような問題点が浮かんできた。

●形式上、日本語のムード形式の内側（先行する用言）と外側（それ自体）の否定が区別される文でも、中国語に訳した結果、形式だけをみると、ムード形式の内側（先行する用言）を否定しているのか、それとも、外側（それ自体）を否定しているのか、区別が付かないのが多い。中国語には、否定のスコープに入るかどうかの区別が存在しているにも関わらず、こうした曖昧な現象が起こるのは、やはり日本語のムード形式に対応している中国語の主観的表現に関連しているのではないかと思われる。

●2.1 でも述べたが、中国語は副詞など言語手段をとる場合がある。ムード形式の内側（先行する用言）から外側（それ自体）の否定に切り替える時も、否定を強調するマークをつけることがある。「ムード形式」に対応する主観的要素（能願動詞）がある一方、こうした表現手段をとるのは中国語の特徴の一つだと言えるなら、副詞や他の言語手段と主観的要素との相関関係をも検討しなければならないだろう。

●本稿で出現した日本語のムード形式に対応している中国語の主観的形式は主に能願動詞“应该”、“打算”が挙げられる。同じく能願動詞の中でも、“打算”と意味的に重なったりする“想”、“要”などがある。従って、主観的要素と否定との関係を究明する際、中国語の能願動詞と否定の関係を分析・整理することが一つの手掛かりではないかと推測される。

3. おわりに

本稿では、寺村秀夫（1979）を出発点として、日本語のムード形式に対応している中国語の主観的要素は形式上どうなっているのかを見てきた。その結果、日本語では、ムード形式の内側（先行する用言）の否定と外側（それ自体）の否定が形式上容易に区別されるのに対して、中国語の場合、ムード形式の内側（先行する用言）の否定と外側（それ自体）の否定の区別が形式

だけによるのでは、はっきり判断できないケースがあることが分かった。否定の場合、中国語は副詞や「動詞＋補語」などの手段をとって、原文の意味に近づけようとする傾向が見られる。また、日本語のムード形式に対応している中国語の主観的要素に「能願動詞」が挙げられる。分析から見出した一番大きな問題は、中国語の「能願動詞」と否定の関係で、今後の課題の中でも、最も大きなものだろうと思う。

参考文献

- 寺村秀夫（1979）「ムードの形式と否定」 『英語と日本語と』 くろしお出版
- 工藤真由美（2000）「否定の表現」 金水敏等『時・否定と取立て』 岩波書店
- 吕叔湘（1985）〈疑问・肯定・否定〉《吕叔湘选集》（2005）P 574－P 590 东北师范大学出版社
- 刘月华等（2002）《实用现代汉语语法》（增订本）商务印书馆
- 張偉莉（2007）『「能願動詞」と否定の関係に対する考察——“应该(yīng gāi)”を通して——』 『日本言語文化研究』 第十一号 P 18－32

辞書類：

商務印書館・小学館 『中日辞典』（2002）

（西安交通大学外国语学院日本語科日本語教員）